

土神と狐

宮沢賢治

青空文庫

(一)

一本木の野原の、北のはづれに、少し小高く盛りあがった所がありました。いのころぐさがいっぱいに生え、そのまん中には一本の綺麗な女の樺かばの木がありました。

それはそんなに大きくはありませんでしたが幹はてかてか黒く光り、枝は美しく伸びて、五月には白き雲をつけ、秋は黄金きんや紅やいろいろの葉を降らせました。

ですから渡り鳥のくわくこうや百舌もずも、又小さなみそさゞいや目白もみんなこの木に停とまりました。たゞもしも若い鷹たかなどが来

てゐるときは小さな鳥は遠くからそれを見付けて決して近くへ寄りませんでした。

この木に二人の友達がありました。一人は丁度、五百歩ばかり離れたぐちやぐちやの谷地やちの中に住んでゐる土神で一人はいつも野原の南の方からやって来る茶いろの狐きつねだったのです。

樺の木はどちらかと云いへば狐の方がすきでした。なぜなら土神の方は神といふ名こそついてはゐましたがごく乱暴で髪もぼろぼろの木綿糸の束のやう眼めも赤くきものだつてまるでわかめに似、いつもはだしで爪つめも黒く長いのでした。ところが狐の方は大へんに上品な風で滅多めったに人を怒らせたり気にさはるやうなことをしなかつたのです。

たゞもしよくよくこの二人をくらべて見たら土神の方は正直で狐は少し不正直だったかも知れません。

(二)

夏のはじめのある晩でした。樺には新らしい柔らかな葉がいっぱいについていゝかをりがそこら中いっぱい、空にはもう天の川がしらしらと渡り星はいちめんふるへたりゆれたり灯ともつたり消えたりしてゐました。

その下を狐が詩集をもつて遊びに行つたのでした。仕立おろしの紺の背広を着、赤革の靴くつもキツキツと鳴つたのです。

「実にしづかな晩ですねえ。」

「えゝ。」樺の木はそつと返事をしました。

「さそり蠍ぼしが向ふを這はつてゐますね。あの赤い大きなやつを昔は支し那なでは火と云つたんですよ。」

「火星とはちがふんでせうか。」

「火星とはちがひますよ。火星は惑星ですね、ところがあいつは立派な恒星なんです。」

「惑星、恒星つてどういふんですの。」

「惑星といふのはですね、自分で光らないやつです。つまりほかから光を受けてやつと光るやうに見えるんです。恒星の方は自分で光るやつなんです。お日さまなんかは勿もちろん論恒星ですね。あん

なに大きくてまぶしいんですがもし途方もない遠くから見たらや
つぱり小さな星に見えるんでせうね。」

「まあ、お日さまも星のうちだったんですわね。さうして見ると
空にはずるぶん沢山のお日さまが、あら、お星さまが、あらやつ
ぱり変だわ、お日さまがあるんですね。」

きつね 狐は おうやう 鷹揚に笑ひました。

「まあさうです。」

「お星さまにはどうしてあゝ赤いのや黄のや緑のやあるんでせう
ね。」

狐は又鷹揚に笑つて腕を高く組みました。詩集はぷらぷらしま
したかなかなかそれで落ちませんでした。

「星に橙だいたいや青やいろいろある訳ですか。それは斯かうです。全体星といふものははじめはぼんやりした雲のやうなもんだつたんです。いまの空にも沢山あります。たとへばアンドロメダにもオリオンにも獵犬座にもみんなあります。獵犬座のは渦巻きです。それから環リング状星雲といふのもあります。魚の口の形ですから魚フィッシュ口マウス星スターとも云ひますね。そんなのが今の空にも沢山あるんです。」

「まあ、あたしいつか見たいわ。魚の口の形の星だなんてまあどんなに立派でせう。」

「それは立派ですよ。僕水沢の天文台で見ましたがね。」

「まあ、あたしも見たいわ。」

「見せてあげませう。僕実は望遠鏡を独乙ドイツのツアイスに注文してあるんです。来年の春までには来ますから来たらすぐ見せてあげませう。」狐は思はず斯う云つてしまひました。そしてすぐ考へたのです。あゝ僕はたつた一人のお友達にまたつい偽うそを云つてしまつた。あゝ僕はほんたうにだめなやつだ。けれども決して悪い氣で云つたんぢやない。よろこばせやうと思つて云つたんだ。あとですつかり本当のことを云つてしまはう、狐はしばらくしんとしながら斯う考へてゐたのでした。樺かばの木はそんなことも知らないでよろこんで言ひました。

「まあうれしい。あなた本当にいつでも親切だわ。」

狐は少し悄しよげ気ながら答へました。

「えゝ、そして僕はあなたの為ためならばほかのどんなことでもやりますよ。この詩集、ごらんないませんか。ハイネといふ人のですよ。翻訳ですけれども仲々よくできてるんです。」

「まあ、お借りしていゝんでせうかしら。」

「構ひませんとも。どうかゆつくりごらんなすつて。ぢや僕もう失礼します。はてな、何か云ひ残したことがあるやうだ。」

「お星さまのいろのことですわ。」

「あゝさうさう、だけどそれは今度にしませう。僕あんまり永くお邪魔しちやいけないから。」

「あら、いゝんですよ。」

「僕又来ますから、ぢやさよなら。本はあげてきます。ぢや、さ

よなら。「狐はいそがしく帰って行きました。そして樺かばの木はその時吹いて来た南風にざわざわ葉を鳴らしながら狐きつねの置いて行つた詩集をとりあげて天の川やそらいちめんの星から来る微かすかなあかりにすかして頁ページを繰りました。そのハイネの詩集にはロウレライやさまざま美しい歌がいっぱいにあつたのです。そして樺の木は一晚中よみ続けました。たゞその野原の三時すぎ東から金きんぎょう牛ぎゅう宮きゆうののぼるころ少しとろとろしたただけでした。

夜があげました。太陽がのぼりました。

草には露がきらめき花はみな力いっぱい咲きました。

その東北の方から熔とけた銅の汁をからだ中に被かぶつたやうに朝日をいっばいに浴びて土神がゆっくりゆっくりやって来ました。い

かにも分別くささうに腕を拱こまねきながらゆつくりゆつくりやって来たのでした。

樺の木は何だか少し困ったやうに思ひながらそれでも青い葉をきらきらと動かして土神の来る方を向きました。その影は草に落ちてちらちらちらちらゆれました。土神はしづかにやって来て樺の木の前に立ちました。

「樺の木さん。お早う。」

「お早うございます。」

「わしはね、どうも考へて見るとわからんことが沢山ある、なかかわからんことが多いもんだね。」

「まあ、どんなことでございますの。」

「たとへばだね、草といふものは黒い土から出るのだがなぜかう青いもんだらう。黄や白の花さへ咲くんだ。どうもわからんねえ。」

「それは草の種子が青や白をもつてゐるためではないでございませうか。」

「さうだ。まあさう云へばさうだがそれでもやっぱりわからんな。たとへば秋のきのこのやうなものは種子もなし全く土の中からはかり出て行くもんだ、それにもやっぱり赤や黄いろやいろいろある、わからんねえ。」

「狐さんにも聞いて見ましたらいかゞでございませう。」

樺の木はうっとり昨夜ゆふべの星のはなしをおもつてゐましたのでつ

い斯^かう云つてしまひました。

この語^{ことば}を聞いて土神は俄^{には}かに顔いろを変へました。そしてこぶしを握りました。

「何だ。狐？ 狐が何を云ひ居^をつた。」

樺の木はおろおろ声になりました。

「何も仰^おつしやつたんではございませんがちよつとしたらご存知かと思ひましたので。」

「狐なんぞに神が物を教はるとは一体何たることだ。えい。」

樺の木はもうすっかり恐^{こは}くなつてぷりぷりぷりゆれました。

土神は齒をきしきし噛^かみながら高く腕を組んでそこらあるきまはりました。その影はまっ黒に草に落ち草も恐^{ふる}れて顫へたのです。

「狐きつねの如ごときは実に世の害悪だ。たゞ一言もまことはなく卑怯ひげふで臆おくびやう

病びょうでそれに非常に妬ねたみ深いのだ。うぬ、畜生の分際として。」
 樺かばの木はやつと氣をとり直して云ひました。

「もうあなたの方のお祭も近づきましたね。」

土神は少し顔色を和げました。

「さうぢや。今日は五月三日、あと六日だ。」

土神はしばらく考へてゐましたが俄にはかに又声を暴あららげました。

「しかしながら人間どもは不届だ。近ちかごろ頃はわしの祭にも供物一

つ持つて来ん、おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたものはきつと泥の底に引き擦り込んでやらう。」土神はまたきりきり

齒はが噛みしました。

樺の木は折角なだめようと思つて云つたことが又もや却^{かへ}つてこんなことになつたのもうどうしたらいゝかわからなくなりたゞちらちらとその葉を風にゆすつてゐました。土神は日光を受けてまるで燃えるやうになりながら高く腕を組みキリキリ齒噛みをしてその辺をうろろしてゐましたが考へれば考へるほど何もかもしやくにさはつて来るらしいのでした。そしてたうとうこらへ切れなくなつて、吠^ほえるやうになつて荒々しく自分の谷地^{やち}に歸つて行つたのでした。

土神の棲すんでゐる所は小さな競馬場ぐらゐある、冷たい湿地で苔こけやからくさやみじかい蘆あしなどが生えてゐましたが又所々にはあざみやせいの低いひどくねぢれた楊やなぎなどもありました。

水がじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄の渋わが湧わきあがり見るからどろどろで気味も悪いのでした。

そのまん中の小さな島のやうになつた所に丸太こしらで拵こしらへた高さ一間ほこらばかりの土神の祠ほこらがあつたのです。

土神はその島に歸つて来て祠の横に長々と寝そべりました。そして黒い瘡やせた脚をがりがり搔かきました。土神は一羽の鳥が自分の頭の上をまつすぐに翔かけて行くのを見ました。すぐ土神は起き直つて「しっ」と叫びました。鳥はびっくりしてよろよろつと落

ちさうになりそれからまるではねも何もしびれたやうにだんだん低く落ちながら向ふへ遁にげて行きました。

土神は少し笑つて起きあがりました。けれども又すぐ向ふの樺の木の上つてゐる高みの方を見るとはつと顔色を変へて棒立ちになりました。それからいかにもむしやくしやするといふ風にそのぼろぼろの髪毛を両手で搔きむしつてゐました。

その時谷地の南の方から一人の木樵きこりがやつて来ました。三つ森山の方へ稼かせぎに出るらしく谷地のふちに沿つた細い路みちを大股おほまたに行くのでしたがやつぱり土神のことは知つてゐたと見えて時々氣づかはしさうに土神の祠ほこらの方を見てゐました。けれども木樵きこりには土神の形は見えなかつたのです。

土神はそれを見るとよろこんでぱつと顔を熱ほてらせました。それから右手をそつちへ突き出して左手でその右手の手首をつかみこつちへ引き寄せるやうにしました。すると奇体なことは木樵はみちを歩いてゐると思ひながらだんだん谷地やちの中に踏み込んで来るやうでした。それからびっくりしたやうに足が早くなり顔も青ざめて口をあいて息をしました。土神は右手のこぶしをゆつくりぐるつとまはしました。すると木樵はだんだんぐるつと円くまはつて歩いてゐましたがいよいよひどく周章あわでだしてまるではあはあはあはあしながら何べんも同じ所をまはり出しました。何でも早く谷地から遁にげて出ようとするらしいのでしたがあせつてもあせつても同じ処ところを廻まわつてゐるばかりなのです。たうとう木樵はおろ

おろ泣き出しました。そして両手をあげて走り出したのです。土神はいかにも嬉しうれさうににやにやにや笑つて寝そべつたまゝ、それを見てゐましたが間もなく木樵がすっかり逆上のぼせて疲れてばたつと水の中に倒れてしまひますと、ゆつくりと立ちあがりました。そしてぐちやぐちや大股にそつちへ歩いて行つて倒れてゐる木樵のからだを向ふの草はらの方へぽんと投げ出しました。木樵は草の中にどしりと落ちてううんと云ひながら少し動いたやうでしたがまだ気がつきませんでした。

土神は大声に笑ひました。その声はあやしい波になつて空の方へ行きました。

空へ行つた声はまもなくそつちからはねかへつてガサリと樺かばの

木の処にも落ちて行きました。樺の木ははつと顔いろを変へて日光に青くすきとほりせはしくせはしくふるへました。

土神はたまらなさうに両手で髪を搔かきむしりながらひとり考へました。おれのこんなに面白くないといふのは第一は狐きつねのためだ。狐のためよりは樺の木のためだ。狐と樺の木とのためだ。けれども樺の木の方はおれは怒つてはゐないのだ。樺の木を怒らないためにおれはこんなにつらいのだ。樺の木さへどうでもよければ狐などはなほさらどうでもいゝのだ。おれはいやしいけれどもとにかく神の分際だ。それに狐のことなどを気になければならないといふのは情ない。それでも気にかゝるから仕方ない。樺の木のことなどは忘れてしまへ。ところがどうしても忘れられな

い。今朝は青ざめて顫^{ふる}へたぞ。あの立派だったこと、どうしても忘られない。おれはむしやくしやまぎれにあんなあはれな人間などをいぢめたのだ。けれども仕方ない。誰^{たれ}だつてむしやくしやしたときは何をするかわからないのだ。

土神はひとりで切ながつてばたばたしました。空を又一^{びき}一^{たか}の鷹が翔^かけて行きましたが土神はこんどは何とも云はずだまつてそれを見ました。

ずうつとずうつと遠くで騎兵の演習らしいパチパチパチパチ塩のはぜるやうな鉄砲の音が聞えました。それから青びかりがどくどくと野原に流れて来ました。それを呑^のんだためかさっきの草の中に投げ出された木樵はやつと気がついておづおづと起きあがり

しきりにあたりを見廻しました。

それから俄にはかに立つて一目散に遁にげ出しました。三つ森山の方へまるで一目散に遁にげました。

土神はそれを見て又大きな声で笑ひました。その声は又青ぞらの方まで行き途中から、バサリと樺かばの木の方へ落ちました。

樺の木は又はつと葉の色をかへ見えない位こまかくふるひました。

土神は自分のほこらのまはりをうろうろ何べんも歩きまはつてからやつと気がしづまったと見えてすつと形を消し融とけるやうにほこらの中へ入つて行きました。

(四)

八月のある霧のふかい晩でした。土神は何とも云へずさびしくてそれにむしゃくしゃして仕方ないのでふらつと自分の祠ほこらを出ました。足はいつの間にかあの樺の木の方へ向つてゐたのです。本当に土神は樺の木のことを考へるとなぜか胸がどきつとするのでした。そして大へんに切なかつたのです。このごろは大へんに心持が變つてよくなつてゐたのです。ですからなるべく狐きつねのことなど樺の木のことなど考へたくないと思つたのでしたけどどうしてもそれがおもへて仕方ありませんでした。おれはいやしくも神ぢやないか、一本の樺の木がおれに何のあたひがあると毎日毎日土神

は繰り返して自分で自分に教へました。それでもどうしてもかなくして仕方なかつたのです。殊にちよつとでもあの狐のことを思ひ出したらまるでからだ^やが灼けるくらゐ辛^{つら}かつたのです。

土神はいろいろ深く考へ込みながらだんだん樺の木^のの近くに参りました。そのうちたうとうはつきり自分が樺の木^ののそこへ行かうとしてゐるのだといふことに気が付きました。すると俄かに心持^がをどるやうになりました。ずるぶんしばらく行かなかつたのだからことによつたら樺の木は自分を待つてゐるのかも知れない、どうもさうらしい、さうだとすれば大へんに気の毒だといふやうな考^がが強く土神に起つて来ました。土神は草をどしどし踏み胸を踊らせながら大^{おほまた}股にあるいて行きました。ところがその強い足

なみもいつかよろよろしてしまひ土神はまるで頭から青い色のかなしみを浴びてつつ立たなければなりませんでした。それは狐が来てゐたのです。もうすっかり夜でしたが、ぼんやり月のあかりによど澱んだ霧の向ふから狐の声が聞えて来るのでした。

「えゝ、もちろんさうなんです。器械的にサインメトリ対称の法則にばかり叶かなつてゐるからつてそれで美しいといふわけにはいかないんです。それは死んだ美です。」

「全くさうですわ。」しづかな樺の木の声がしました。

「ほんたうの美はそんな固定した化石した模型のやうなもんぢやないんです。対称の法則に叶ふつて云つたつて実は対称の精神をも有つてゐるといふぐらゐのことが望ましいのです。」

「ほんたうにさうだと思ひますわ。」樺の木のやさしい声が又しました。土神は今度はまるでべらべらした桃いろの火でからだ中燃されてゐるやうにおもひました。息がせかせかしてほんたうにたまらなくなりました。なにがそんなにおまへを切なくするのか、高たかが樺の木と狐との野原の中でのみじかい会話ではないか、そんなものに心を乱されてそれでもお前は神と云へるか、土神は自分で自分を責めました。狐きつねが又云ひました。

「ですから、どの美学の本にもこれくらゐのことは論じてあるんです。」

「美学の方の本沢山おもちですの。」樺かばの木はたづねました。

「えゝ、よけいもありませんがまあ日本語と英語と独ドイツ乙語乙のなら

大抵ありますね。伊大利イタリのは新らしいんですがまだ来ないんです。

「」

「あなたのお書齋、まあどんなに立派でせうね。」

「いゝえ、まるでちらばってますよ、それに研究室兼用ですからね、あっちの隅すみには顕微鏡こつちにはロンドンタイムス、大理石のシイザアがころがつたりまるとつきりごったごたです。」

「まあ、立派だわねえ、ほんたうに立派だわ。」

ふんと狐の謙遜けんそんのやうな自慢のやうな息の音がしてしばらくしいんとなりました。

土神はもう居ても立っても居られませんでした。狐の言ってるのを聞くと全く狐の方が自分よりはえらいのでした。いやしく

も神ではないかと今まで自分で自分に教へてゐたのが今度はできなくなつたのです。あゝつらいつらい、もう飛び出して行つて狐を一裂きに裂いてやらうか、けれどもそんなことは夢にもおれの考へるべきことぢやない、けれどもそのおれといふものは何だ結局狐にも劣つたもんぢやないか、一体おれはどうすればいゝのだ、土神は胸をかきむしるやうにしてもだえました。

「いつかの望遠鏡まだ来ないんですの。」樺の木がまた言ひました。

「えゝ、いつかの望遠鏡ですか。まだ来ないんです。なかなか来ないです。欧州航路は大分混乱してますからね。来たらすぐ持つて来てお目にかけますよ。土星の環わなんかそれあ美しいんですか

らね。」

土神は俄にはかに両手で耳を押へて一目散に北の方へ走りましました。だまつてゐたら自分が何をするかわからないのが恐ろしくなつたのです。

まるで一目散に走つて行きました。息がつゞかなくなつてばかり倒れたところは三つ森山の麓ふもとでした。

土神は頭の毛をかきむしりながら草をころげまはりました。それから大声で泣きました。その声は時でもない雷のやうに空へ行つて野原中へ聞えたのです。土神は泣いて泣いて疲れてあけ方ほんやり自分の祠ほこらに戻りました。

(五)

そのうちたうとう秋になりました。樺の木はまだまつ青でしたがその辺のいどころぐさはもうすっかり黄金きんいろの穂を出して風に光りところどころすゞらんの実も赤く熟しました。

あるすきとほるやうに黄金きんいろの秋の日土神は大へんじやうきげん上機嫌でした。今年の夏からのいろいろなつらい思ひが何だかぼうつとみんな立派なもやのやうなものに変わって頭の上に環わになつてかかつたやうに思ひました。そしてもうあの不思議に意地の悪い性質もどこかへ行つてしまつて樺かばの木なども狐きつねと話したいなら話すがいゝ、両方ともうれしくはなすのならほんたうにいゝことなん

だ、今日はそのことを樺の木に云つてやらうと思ひながら土神は心も軽く樺の木の方へ歩いて行きました。

樺の木は遠くからそれを見てゐました。

そしてやつぱり心配さうにぶるぶるふるへて待ちました。

土神は進んで行つて気軽にあいさつ挨拶しました。

「樺の木さん。お早う。実にいゝ天気だな。」

「お早うございます。いゝお天気でございます。」

「てんたう天道といふものはありがたいもんだ。春は赤く夏は白く秋は黄いろく、秋が黄いろになるとぶだう葡萄は紫になる。実にありがたいもんだ。」

「全くでございます。」

「わしはな、今日は大へんに気分がいゝんだ。今年の夏から実にいろいろつらい目にあつたのだがやつと今朝からにはかに心持ちが軽くなつた。」

樺の木は返事しようと思いましたがなぜかそれが非常に重苦しいことのやうに思はれて返事しかねました。

「わしはいまなら誰たれのためにも命をやる。みみずが死ななければならんならそれにもわしはかはってやっていゝのだ。」土神は遠くの青いそらを見て云ひました。その眼も黒く立派でした。

樺の木は又何とか返事しようと思いましたがやつぱり何か大へん重苦しくてわづか吐息をつくばかりでした。

そのときです。狐がやって来たのです。

狐は土神の居るのを見るとはつと顔いろを変へました。けれども戻るわけにも行かず少しふるへながら樺の木の前に進んで来ました。

「樺の木さん、お早う、そちらに居られるのは土神ですね。」狐は赤革の靴くつをはき茶いろのレーンコートを着てまだ夏帽子をかぶりながら斯かう云ひました。

「わしは土神だ。いゝ天気だ。な。」土神はほんたうに明るい心持で斯う言ひました。狐は嫉ねたましさに顔を青くしながら樺の木に言ひました。

「お客さまのお出いでの所にあがつて失礼いたしました。これはこの間お約束した本です。それから望遠鏡はいつかはれた晩にお目

にかけます。さよなら。」

「まあ、ありがたうございます。」と樺の木が言つてゐるうちに狐はもう土神に挨拶もしないでさっさと戻りはじめました。樺の木はさつと青くなつてまた小さくぷりぷり顫ふるひました。

土神はしばらくの間たゞぼんやりと狐を見送つて立つてゐました。狐の赤革の靴くつのキラツと草に光るのにびっくりして我に返つたと思ひましたら俄にはかに頭がぐらつとしました。狐がいかにも意地をはつたやうに肩をいからせてぐんぐん向ふへ歩いてゐるのです。土神はむらむらつと怒りました。顔も物もの凄すごくまつ黒に變つたのです。美学の本だの望遠鏡だのと、畜生、さあ、どうするか見ろ、といきなり狐のあとを追ひかけました。樺かばの木はあわ

てて枝が一ぺんにがたがたふるへ、狐もそのけはひにどうかしたのかと思つて何気なくうしろを見ましたら土神がまるで黒くなつて嵐あらしのやうに追つて来るのでした。さあ狐はさつと顔いろを変へ口もまがり風のやうに走つて遁にげ出しました。

土神はまるでそこら中の草がまっ白な火になつて燃えてゐるやうに思ひました。青く光つてゐたそらさへ俄かにガランとまっ暗な穴になつてその底では赤い焰ほのほがどうどう音を立てて燃えると思つたのです。

二人はごうごう鳴つて汽車のやうに走りました。

「もうおしまひだ、もうおしまひだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡」
と狐は一心に頭の隅すみのところで考へながら夢のやうに走つてゐまし

た。

向ふに小さな赤剥あかはげの丘がありました。狐はその下の円い穴にはひらうとしてくるつと一つまはりました。それから首を低くしていきなり中へ飛び込まうとして後あしをちらつとあげたときもう土神はうしろからぱつと飛びかかつてゐました。と思ふと狐はもう土神にからだをねぢられて口を尖とがらして少し笑つたやうになつたまゝぐんにやりと土神の手の上に首を垂れてゐたのです。

土神はいきなり狐を地べたに投げつけてぐちやぐちや四五へん踏みつけました。

それからいきなり狐の穴の中にとび込んで行きました。中はがらんとして暗くたゞ赤土が奇麗に堅められてゐるばかりでした。

土神は大きく口をまげてあけながら少し変な気がして外へ出て来ました。

それからぐつたり横になってゐる狐の屍骸しがいのレーンコートのかくしの中に手を入れて見ました。そのかくしの中には茶いろなかもがやの穂が二本はひつて居ました。土神はさつきからあいてゐた口をそのまゝまるで途方もない声で泣き出しました。

その泪なみだは雨のやうに狐に降り狐はいよいよ首をぐんにやりとすうすら笑つたやうになつて死んで居たのです。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

土神と狐

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>